

不登校ときょうだい

- 3 家族の事例からの考察 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
長東 佳菜子

不登校が当事者だけでなく、その家族にも影響を与えることは周知の事実である。また当事者にとって家族の存在が大きいことも知られている。しかし、その“家族”できょうだいの存在はあまり重要視されていないのではないだろうか。そこで、筆者は先行研究を探してみたが、「不登校」と「きょうだい」「同胞」に関する研究は数が少なく、不登校の家族に関する文献の中でもきょうだいに関する記述は少なかった。さて、大学院で学ぶ中で、筆者はいくつかの不登校の「親の会」に活動に参加・見学をする機会に恵まれた。その場でもきょうだいについて聞いてみると、「きょうだいのことはよくわからない」「たぶん大変だったと思う」「きょうだいと不登校のことは別」などの話が聞かれた。親にとってきょうだいの様子や思考は曖昧なものだということが多いと感じた。このように、きょうだいの存在が不登校問題の研究対象として重視されておらず、同じ家族の中でもきょうだいのことはよくわかっていないということから、不登校のきょうだいに注目した。そこで、

きょうだいにとっての不登校に伴う影響や思いを明らかにすることで、きょうだいへの家族の対応やきょうだいに向けた支援の必要について考えていきたい。また逆に、不登校や当事者、家族へ対するきょうだいの考えを知ることによって、不登校問題の解決・改善に役立つ可能性を考え、今後の不登校支援におけるきょうだいの可能性を探っていきたい。

調査対象は3家族（親5名、きょうだい3名）で、インタビュー調査を行っている。親へのインタビューから家庭での子育て観、学校観、不登校以前からインタビュー現在までの家族の変化を聞き取り、不登校に伴う家族の様子を調査した。きょうだいへは半構造化面接にて不登校を伴うきょうだい自身の心情や状況を話して頂いた。調査の結果、不登校による家族全体への影響があり、それはきょうだいにも及んでいることがわかった。また家族以外やきょうだい自身の成長へも影響があった。そして親とは違った視点で不登校の同胞や家族を考えている様子も伺えた。

今回は3家族のみしか調査できず、結果には偏りがあることが考えられる。しかし、きょうだいには不登校に伴う影響はあり、その背景に理解不足があった。これに家族もしくはきょうだい本人への支援の可能性があると考えられる。またきょうだい独自の視点で不登校、家族、当事者を考えており、親の考えと異なることもあった。この親と異なる視点は不登校問題の解決・改善への可能性を秘めていることも考えられた。きょうだい視点の考えを知ることが不登校問題に新たな切り口で取り組むために役立つのではないかと考察した。